

七 日本の玄関口「東京駅」をつくった

英語が好きな少年 建築家 辰野金吾 (二八五四〜一九一九)

唐津市内の小学生のゆうき君とじゅん子さんの二人が、一まいの写真を見て話しています。

「ぼくは、この写真と似た建物を知っているよ。」

「大手口近くにある銀行によく似ているわ。」

二人の話は、本当でしょうか。下の写真を見比べてください。よくにているね。二人は東京駅の写真を見ていたのです。

みなさんは、東京駅を見たことがありますか。東京駅は、今から約八十年前にできた赤レンガづくりの建物で、外国のお城のような姿をしています。今でこそ、東京駅は高いビルに囲まれています。できたばかりの東京駅は、野っ原のようなどころにありました。ですから人々は、その姿を見て海に浮かぶ軍艦にたとえたそうです。そんな東京駅をつくった人が辰野金吾です。

二人の話の中に出てくる銀行も、金吾の指導でつくられた建物だそうです。



唐津市内にある銀行(唐津市本町)

です。二人は、金吾のことを調べてみることにしました。

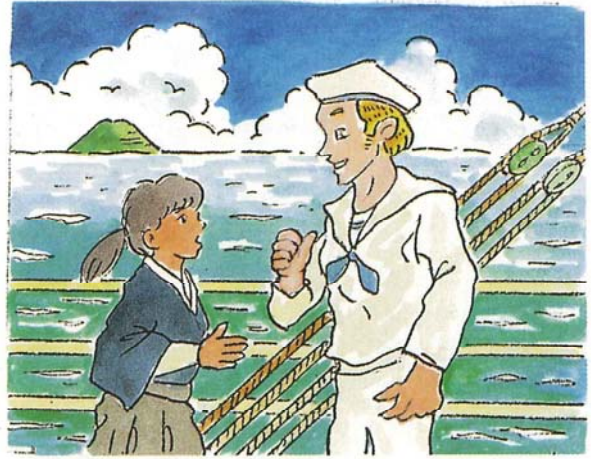
金吾は、安政元年（一八五四）現在の唐津市坊主町で貧しい武士の子として生まれました。当時の日本は、武士の時代から明治という新しい時代に変わる節目で、天地がひっくり返ったようなとても大変な時代でした。そのような時代に金吾は生まれたのです。

当時、武士の子は、小さいときから学問にはげんでいました。金吾も九歳くらいの時から学び始めました。金吾は、とても勉強が好きでしたが遊びもよくしました。近所の子どもたちと山や川に出かけては木に登ったり魚を取ったり、時には、おおぜい集まってチャンバラごっこをしたりして町中で遊び回りました。金吾が十四歳の時に、明治という新しい時代になりました。

イギリスやアメリカなど欧米の国々に追いつき追いこすことが国の目標になりました。唐津藩は、西洋文化の窓口である長崎に近いということもあって、唐津の殿様は英語学校をつくりました。新しい時代に英語は必要と考えたのです。学問が好きな金吾は、そのことをとても喜びました。十六歳になった時、さっそく入学し英語を学び始めました。その時の先生は、後に、大蔵大臣となる高橋是清という人でした。高橋先生は金吾と同じ年でしたが、英語がよくできました。授業は英語で行い、日本語はなるべく使わないようにしました。また、勉強で使う本は外国で使われていた本でした。だからすべて英語で書かれています。今でこそ参考書や辞典があり比較的簡単に勉強できますが、当時はなかなか手に入りませんでした。



東京駅（東京都千代田区丸の内）



船員に話しかける金吾

た。先生だけがたよりだったのです。それで、先生の言うことを一言も聞きもらすまいと必死ひっしになって勉強しました。人が寝静ねしずまつてからも勉強しました。そんな金吾でしたから短期間たんきかんのうちに英語が上達していきました。ある時、高橋先生は、港みなとの外国船に生徒たちを連れていきました。どれぐらい英語が通じるかためしたかったのです。金吾たちは、おそろおそろ話しかけてみました。すると、船員はわかったのです。金吾たちは、おそろおそろ話しかけてみました。そこで初めて自分たちの習っている英語は本物であることがわかり、金吾たちは大変喜たいへんびました。それからますます身を入れて勉強に励はげみました。

この英語学校は、わずか一年余あまりでなくなりますが、金吾にとってはかけがえのない月日となりました。東京ではイギリス人

十八歳になった金吾は、さらに英語の勉強がしたくなって上京することになりました。東京ではイギリス人の家庭に住みこみ、以前にもまして英語の勉強に力を入れました。こうして金吾は、工部省工学寮こうぶしょうこうがくりょう（後の工

部大大学校、今の東京大学工学部）に入学し、さらに学問に励はげみました。金吾はここで初めて建築学に出あいま

した。建築学の先生はコンドルというイギリス人で、文明開化ぶんめいけいかのシンボルといわれた鹿鳴館ろくめいかんを作った人でした。建築学のおもしろさにひかれた金吾は、新しい時代にふさわしい西洋風の建物を作ろうと心にちかいました。その授業は全部英語でしたが、金吾は得意とくいの英語力を発揮はつきし、めきめきと頭角とうかくを現あらわしました。

金吾は英語が得意なだけの学生ではありませんでした。すでに地震対策じしんたいさくに目を向けて、人知れず氣象台にかよい、地震じしんに強い建物を研究するなど、建築家としてすぐれた一面を持っていました。このような金吾で

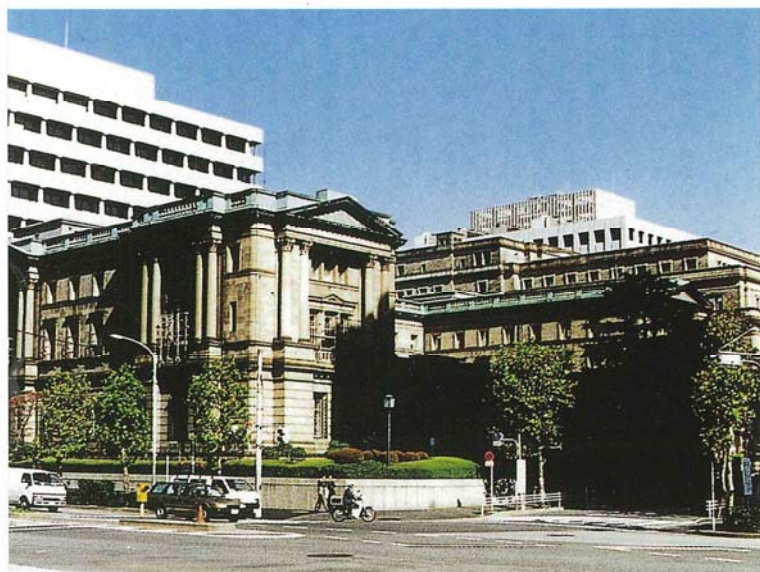
したので、工学寮をトップで卒業し、周囲の人々をおどろかせました。

明治十二年（一八七九）に工部大学校を卒業した金吾は、十人の仲間と共にヨーロッパ留学を命じられました。その中の一人に、志田林三郎がいました。ヨーロッパでさらに建築学を勉強したり一流の西洋建築物を研究したりして帰りました。そして帰国後の明治十七年に、あのコンドル先生の後について工部大学校の先生となり多くの学生たちの指導につとめました。そのころは、大学の先生といえばほとんどが欧米人でしたので、日本人が大学の先生になることはきわめてまれなことでした。それだけに金吾の名声はあがりました。また後に東京駅や日本銀行本店など多くの洋風建築物をつくり、金吾の名は、いつそう日本中に広がりました。これらの建物は、あの関東大震災にもびくともしなかつたそうです。

建築家辰野金吾の出発点は、少年時代の唐津藩英語学校での一年余りの学業にあるといえるでしょう。

「ぼくは、少年時代のわずか一年余りの英語の勉強が、その人の一生まで決めてしまうとはおどろいたよ。」

「わたしはりっぱな建物をつくらうと努力したことに感心したわ。」
みなさんはどんな感想を持ちましたか。第二の辰野金吾は、君かも知れませんか。



日本銀行本店（東京都中央区日本橋本石町）